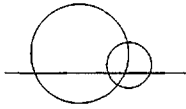


〈講演〉



1. 東亜同文書院とその歩み

愛知大学文学部教授 藤田佳久

【司会】 先生ありがとうございました。続きまして講演に移ります。最初は東亜同文書院大学記念センター長の藤田佳久教授より、テーマは「東亜同文書院とその歩み」についてご講演をお願いいたします。

【藤田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきましたように、愛知大学東亜同文書院大学記念センター長、ずいぶん長い名前ですが、2つの大学名がこの中に入っているということでございます。テーマは「東亜同文書院とその歩み」ということで始めさせていただきます。

今日は弘前の地で、山田兄弟を中心に東亜同文書院を含めた講演会を開くことになりましたが、その準備は1年ほど前にスタートしました。度々こちらにお邪魔し、今日一番最後にご挨拶をいただく貞昌寺の赤平和尚さんにお会いしてご協力をいただき、それぞれの組織の方々、地元の市役所、市当局、コンベンション協会や各新聞社など、いろいろなところから、ぜひそれはやっていただきたいという非常にありがたいお言葉をいただきまして、今回のこの催しにこぎつけることができました。私共はおととい弘前入りをしましたが、おとといは地震があり新幹線が動かないということで、仙台駅で「全部下車しなさい」、「ここから先は旅行を中止してください」というふうに言われまして、これはえらいことだということでしたけれども、幸いにも高速バスが仙台から弘前まで動

いていまして、急遽そちらに乗り換えて、こちらで昨日丸1日準備を進めることができました。幸いご当地の被害もあまり大きくなかったということでわれわれも大変安心し、この会をうまく進めることになりました。そういう点で大変ありがたく思っております。

先ほど学長代行の佐藤先生のほうからもお話がございましたけれども、このご当地で山田兄弟および東亜同文書院、そしてその後の今日の愛知大学、そのあたりのご関係を併せてご理解いただけたら幸いだと思っております。われわれのスタッフの発表もありますが、特に今日3番目をお願いしております地元のいずみさんには、ご多忙のところ今回の講演会でお話しいただけるとということで、ご協力を大変ありがたく思っております。そういうわけで本日は最後までご清聴いただけたらありがたいと思います。明日はこの会場は一変しまして、全面的にこの場所を展示施設に模様替えいたします。本日後ろの壁の展示はまださわりだけです。ぜひ明日も足を運んでいただいて、資料の展示をご覧になっていただければわれわれとしても大変ありがたいと思っております。

前置きが長くなりました。私はトップバッターとして、東亜同文書院というのはどんな学校だったのかと。山田兄弟を生み出した学校ですが、その全体像を私のほうでお話させていただいて、あとは個別専門的なお話が次々と続くという形にさせていただきます。スライドをけっこうたくさん

用意いたしましたので、時間の関係もございまして少し早めにご説明をさせていただきます。

これが上海にございました東亜同文書院のメインキャンパスの正面像であります（図1）。約50

年の歴史がありますけれども、そのうちの20年あまりがこのキャンパスで、一番いい時でした。しかし第2次上海事変で焼けてしまい、そのあとまた校舎を隣の、当時戦争が激しくなつてすでに



図1. SHANGHAI. Tung Wen College.

院書文同亞東 海上

疎開し、避難民が占拠していた上海交通大学のほうへ移したりしまして、昭和12年（1937年）以降は日中間の戦争が始まり、とくに昭和18年以降は少し翻弄されたという歴史がございます。開学以来、いろいろ苦勞しながら学校をせりあげてきて、これが一番いい時の学校の正面の姿であ

ります。下にありますように上海のトンウェンカレッジと呼ばれておりまして、日本人の秀才が集まる学校として中国側でも非常に広く知られた学校でありました。

東亜同文書院が発足するにあたってはこの3の方が非常に大きな役割を果たしております。（図2）



近衛篤彦



東方高・荒尾翔



山洲・根澤一

図2. 東亜同文書院の創設者たち

まずは真中に写っている荒尾精という方。この方は愛知県（幕末の尾張藩）の出身の方であります。明治になって世の中の欧米志向がますます強まる中で、隣の中国に関心を持った人です。明治になって軍隊に入り、熊本の鎮台に行った時、九州と中国は近いですから先人達から中国の情報を聞きまして、江戸時代まで漢詩漢文だけで中国を知っていた日本人にとっては現実の中国を知ったということで大変大きなあるいは新鮮な衝撃を受けながら、自分も見てみたいというわけで中国へ渡ったわけです。この時ローマ字で有名なヘボンという方が彼を受け入れてくれた。彼は上海で活動しさらに漢口（揚子江の中流で当時の中国の本当のセンター）で本屋さんもやりながらたくさんの情報を集めて中国を知ろうとしたわけです。その後、1,000頁を超えるほどの大作の『清国通商綜覧』という、今流に言いますと中国商業地理というか、初めて中国の実態を書いた本を1892年に出します。それが当時ベストセラーになって、日本人に初めて中国の実態を知らせた本として有名になったんですね。

この方が帰ってから日清貿易研究所というのを1890年に作って、中国との取引のできる人材を養成する必要があると。欧米とは違ってすぐ隣に中国があるではないかということで、そういう学校を作って約150人の学生を集めるんですが、日清戦争が始まって中断してしまいました。それが終わってから友人であった根津一という方に院長を譲って東亜同文書院の立ち上げをやるわけです。そのベースの企画を行なったのが近衛篤磨という方で、近衛家の当時貴族院議長です。欧米に留学した非常に開明的な、近衛家でも非常に頭の切れる優れた人でありました。日清戦争に勝ってから、日本の中には中国をいろんな意味で解釈する人、あるいは団体ができますが、冷静に文化・教育の交流事業をきちんとやって、お互いにレベルアップすべきであるということを中心にしまして、1つは学校教育というものに力点を置いていた。こ

の3人が力を合わせて東亜同文書院が成立していきます。そのバックは近衛篤磨が中心になりました民間団体の東亜同文会という組織であり、ここが東亜同文書院の経営母体になりました。

先ほどヘボンにお世話になったと言いましたが、それ以前にもう1人岸田吟香（麗子像で有名な画家岸田劉生の父親）がやはりヘボンを頼って上海で、日本人としては初めての国際商人でしょうか、目薬を作ったりして非常に利益を上げておられた。そこへ行って一緒に英語の辞書を作ったりいろいろやった方で、横浜へ帰って日本で最初に新聞を発行したりした、その世界では有名な人です。また劉生のお弟子さんに、豊橋に住んでいる高須という方がおられて、愛知大学のロゴを、終戦の翌年開学の時に作られたというようなことで、そういう意味でも愛大へもつながっているところがあります。

荒尾精がまず最初に中国に渡って中国情報を集めていくわけですが、その時に日本から数人の若者達がやってきて、彼等はまだトレーニングなしであっちこっちの情報を少し見てきなさいというふうにして収集させました。蘭州というところでいろんな記録をとったのが一部残っています。内容はここでは省きますが、こういうような形であっちこっちの地域的な情報が荒尾精のもとに集まったわけです。その蘭州の記録の中に周辺地域の地名が載っていて、この辺のところはその時期に地域の情報収集ができていたということを表しています。西のほうはシルクロード沿いの近くまで地名が出てきます。そこまで行った方は帰ってこなかったもので、どこまで調査したか分かっていません。ウルムチですね、今は。新疆ウイグル自治区のセンターですけれども。そこまで記録はありますが細かな情報までは分かっていません。もしその人が行ってきちんと調査して帰ってこられたら、日本人として最初のシルクロード沿いの調査をやったということになると思います。明治のまだ10年代ですね。荒尾精はそ

の後勉強してこれだけの地名を中国の中で記載するぐらい多くの情報を集め、前述した『清国通商綜覧』という1,000頁を超えるような本の中に集約されたわけです。もうほとんどの省にわたっております。これは銅の製品地図です。いろいろな商品見本を紹介するんですけども、こういう銅の

製品で日本にないようなものもたくさんあって優れている(図3)。だから清国貿易をもっと活発にやるべきだというような形で紹介しています。

そしてもう1回復習ですが、荒尾精、根津一が日清貿易研究所という学校を最初に開設したわけですが、そのあと日清戦争後、東亜会とか同文会、

第三圖

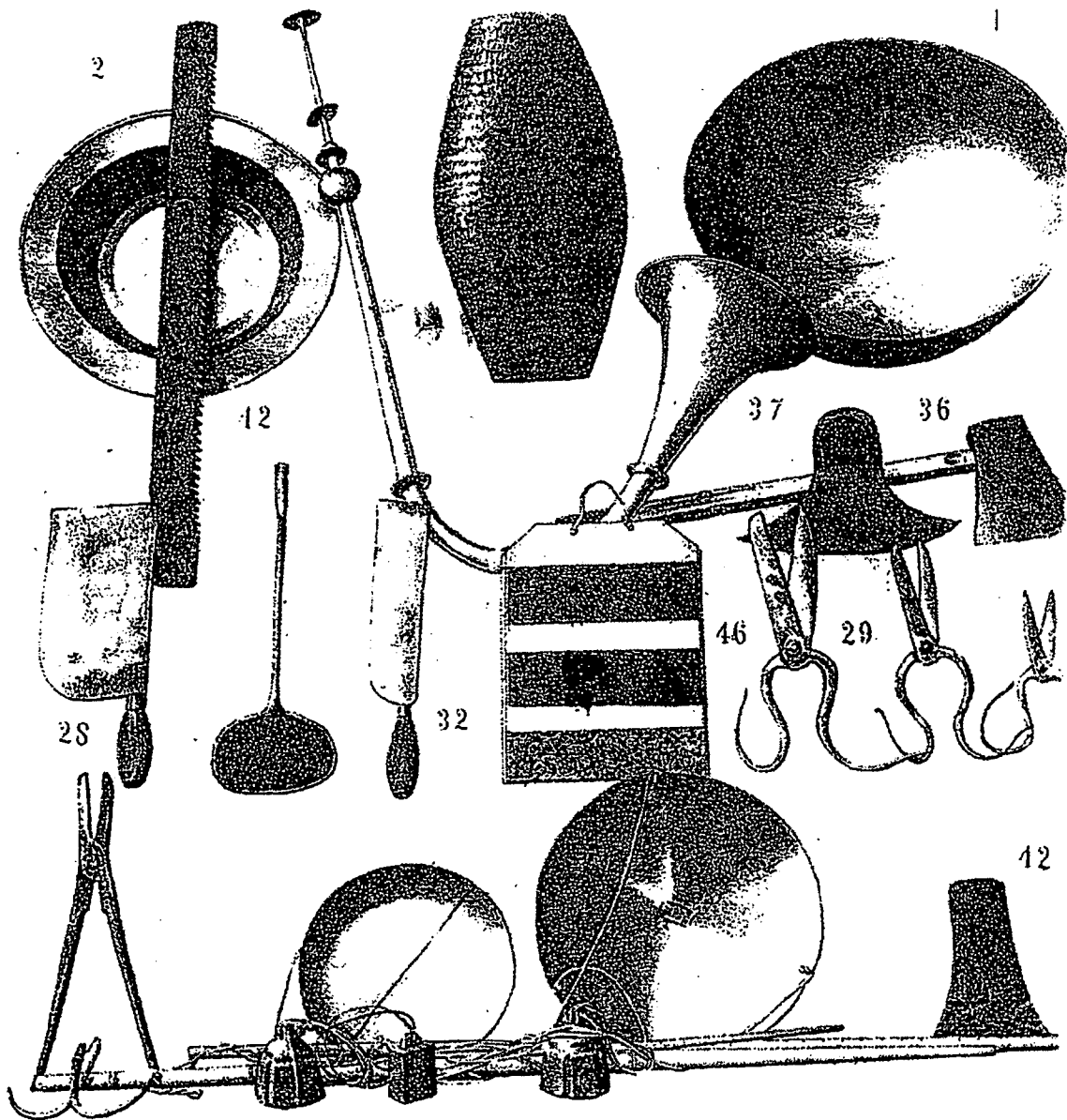


図3 「清国通商綜覧」に紹介された清国の銅製品

その他いろんな団体ができるんですが、この2つのうち弘前出身の陸羯南は東亜会に入っていました。多分に政治色の強いグループでした。一方の同文会はややクールな人達が入っていて、これが合同して1898年に東亜同文会を作り、近衛篤磨が会長になった。したがって非常にクールな形で清国をどういうふうに保全したらいいのか、列強にどんどん食い荒らされていく清国をきちんとレベルアップしなくちゃいけないだろう、それには教育が要る、というわけで教育文化事業を展開していく。そして初めて1900年に南京に同文書院を作ったわけです。ちょうどその頃弘前から横浜へ出てきて水産会社等に勤めていた山田良政が、当時は小さな学校でしたからその教授兼事務職みたいな形で入っておられたわけです。その弟さんが純三郎という方でありました。ところが義和団の変で、南京はちょっと危ないというわけで上海へ移って、折しもちょうど上海へ東亜同文書院を作るというので合体をしまして上海東亜同文書院ができたわけです。そしてそれが戦後愛知大学へ移っていったわけです。

まず最初にできたのが東京同文書院です。清国からの留学生をみんなここへ受け入れて、彼等を教育した。それ以外に朝鮮にもこういう学校を作りました。普通の学校、あるいは語学学校等で、校長さんにはやはり弘前出身の笹森儀助という方がなっています。後に琉球の調査あるいは南のほうの調査に出かけたほどの探検家としても知られています。そして先ほどの東亜同文書院が上海に出来まして、後に中国の学生諸君も受け入れて勉強させようということになったのです。

その他に日本で言うと今の中学校かな、中日学院あるいは江漢中学というような学校を各地に作りましたが、戦時中には東亜工専とか北京工専、北京経専というような学校も次々に統合し、教育の中で大きなウェイトを占める学校に発展していきます。その中でももちろん書院が中心です。最初のカリキュラムをみますと、最初はまだこうい

う程度でしたが、注目されるのはやっぱり中国語の徹底的な教育が行なわれていることです。商業実務関係の学校ですのでビジネススクールと言ったほうがいいと思います。戦後になってイデオロギー対立の中で、上海にあったんだからスパイ学校ではなかったかによく言われたりしますが、そういうカリキュラムは見られないですね。きちんとしたビジネススクールとしてスタートしたということが分かります。

ところで、今から15年ほど前、書院の卒業生の人達にその出身地についてアンケートをした時に出てきたのを、時期別に分けたものです。これが16期から39期、これがそのあとなんですけれども。当時の出身者は全国から、最初は県費生と言って県が授業料からお小遣いまで全部お金を出してもらい、2人ずつ受け入れましょうということで全県に広がって、競争率は非常に激しかった。当時日本の経済はそんなにいいわけではありませんから、お金がなくて勉強ができないという方々、特にビジネス界に行こうという人はタダで上海で教育が受けられるという好条件でした。上海は当時アジアでは最大の国際都市で、東京や大阪以上でしたから各県からたくさんの希望者が出て競争が非常に激しかったわけです。後に今度は私費生、授業料が非常に高かったんですけれども、自分で負担してでも行きたいという人が都市を中心に出てまいりまして、そういう人達も入れて定員を増やしていくわけです。最初は県費生のみ70人ぐらいですが、私費生を受け入れるようになると100人を超えていく時代が変わっていきます。入学当時の夢はアンケートによりますと中国で働くとか、骨を埋めるとか、日本と中国、アジアのためにとか、中国人のためにとか、中国を見て学びたいとか、中国語を勉強したいとか、こういう志望動機が多くを占めております。

こうして学生を集めたけれども、最初は東亜同文会も東亜同文書院もあまりお金がなかったので修学旅行しかできませんでした。1901年の入学

ですから2年生の時、誰が書いたかわかりませんが山東半島へ行った時の旅行記が残っています。また、これは2期の、1902年に入って卒業していく学生達の集合写真をみますと、当時の清国ですからみんな弁髪です。頭を後ろのほうに長く垂らしています。そのうちの1人、北九州市出身の波多野養作という人がここに写っています。この人は単独で、5人の中の1人として選ばれてシルクロードへ旅行した人です。

日英同盟が日露戦争の直前に結ばれ、イギリスはロシアを封じ込めるために日本と協力して、清

国の西、シルクロードのほうにロシアの勢力がどれくらい入ってくるか調査してほしいとイギリス政府から申込みがあったけれども、外務省はそんな手筈を持っていませんでした。そこで最終的に東亜同文書院に依頼し、根津院長はそれを受けて、ちょうど卒業する5人を呼んで「行ってくれないか」と要請したことがありました。当時の根津院長は書院の神様みたいな人でしたから、5人はOKということで2年かけてシルクロード沿いに西域へ行って帰ってきました。こんな道の悪いところで馬車に乗ったり歩いたりして、痔になって

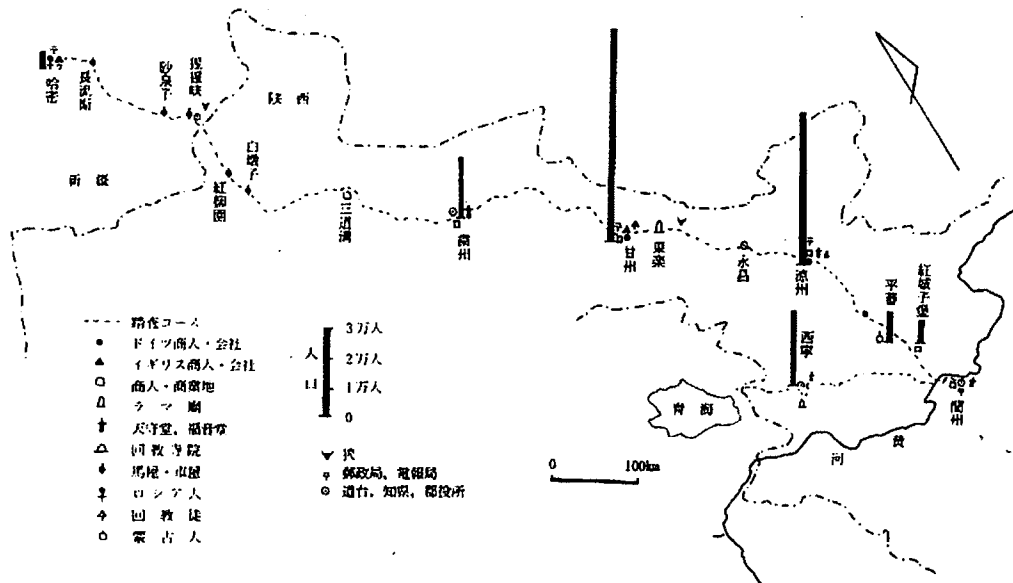


図4. 波多野養作の踏査コースと地域情報の分布図（蘭州から哈密、1905年）
 （波多野養作の日記より作成）

しまったり、あるいは熱病のマラリアになったり、大変な旅をしたわけです。その道中の記録をいろいろ私のほうで整理しますと、何国人がどのぐらいいたのかも記録され、たくさんの外国人が入っていたことが分かるんですね（図4）。ドイツ人、イギリス人、ロシア人と。これは河西回廊、ハミ瓜で有名な哈密。シルクロードがずっと続きます。その旅行がどんな様子だったかというのを示してみたものです。熱病のマラリアが出ますと1週間記録が無くなりますけれども、かなり冷静にいろんなものを記録して、非常に優れた旅行記録です。

これは黄河の流域を北京へ帰ってくる時のコースとその周辺の様子です。また、ルート別に毎日の天気や気温が書かれていて、これも非常に貴重な資料になっています。

当時の中央アジアは列強にとって最後に残された秘境というわけで、次々に各国は使節団を送って調査をしたわけです。当時大谷光瑞が学生としてロンドンにいた時にそういうのを聞いて、仏教遺跡が多いならわれわれ日本人がやるべきだというので、全くのど素人の在英中の学生達を集めてロシア経由で入ったのが、書院の学生が調査に行

く前の年でした。大谷光瑞は電報が来てこのままここからインド経由で帰ってしまうわけですが、残った2人、堀賢雄ともう1人がこの西域ルートを歩いて北京まで帰っています。しかしそれはもう調査ではなくて、遺跡を少し見て帰っただけで、調査は書院の人達が初めて本格的にやったのです。

そのうちの林出賢次郎という方は現地の指導教官にもう1回来てくれと言われて、また現地へ出かけて行って、現地で地元民の教育に当たっています。満洲国が成立した時には皇帝溥儀の事実上の秘書役をやられて、溥儀の味方ばかりするというので関東軍から首になった人です。そういうような傑物も出ております。この写真は先ほどの波多野養作という方です。40代の頃は中国の鉱山会社で働いていましたけれども、日中戦争が始

まった時にこの方はピストルで自殺をしてしまいます。「せっかく俺達が一所懸命やってきたのに日本の軍部が完全に中国との関係を破壊してしまう」と嘆いたということです。

しかし5人が無事帰還成功したというので「われわれも行きたい」と書院生の夢が大きく膨らみます。折しも外務省から5人の偉業に対し書院へ3万円が寄贈され、とりあえず3年間中国大陸あるいは東南アジアに延びる大旅行が可能になりました。中国語も徹底的な教育をやりまして、この大旅行もこなせる体制をつくっていきます。われわれの学校にも膨大な旅行記録、手書き資料が残っております。私も早くからこれに注目して研究をしてきました。

これらの写真は出発風景です(図5)。だいたいこんなアフリカ探検隊みたいな感じで、各班に



図5.「大旅行」への出発

はライカのカメラが1台ずつ与えられ、この中で保健係とか会計係とか役が決まっています。当時中国は統一貨幣ではありませんでしたから小銀を用いました。体にそれを縛りつけて、会計の人は重たくてしょうがない。この写真は頭陀袋の

中にいろんなものを入れて出発していく時の様子です。最初の頃はだいたい5か月、後半になりますと3か月ぐらいです。ほとんど都市ではなく農村部をかなり歩きましたので、中国の実態を知ったのはおそらくこの書院の学生グループが世界で



最初ではないでしょうか。日本のインテリの人達は上海とか北京とか天津とかの都市には行きましたけれども、農村に行っている人はほとんどいません。出発前の写真はオートバイ、車を用意していますが駅まで行っただけで、車であっちこっち行ったわけではありません。

全部で700コース行っています。その時にパスポート、執照ですが、風呂敷包みを広げたくらい大きなパスポートです。ここにコースを書いていくとコース沿いの各知事がそれを受け入れるわけです。危険区域は兵隊を出してくれるという形で旅行が進められました。辛亥革命以降は軍閥間の争いがありましたし、大強盗団、土匪と呼ばれるグループが出没していて、ずいぶん危険な中での大旅行でした。今だったら父兄が猛反対して絶対できない旅行だと思います。約5,000人の人が参

加しましたが、実際にこの旅行中の戦争や土匪によって亡くなった人はいませんでした。ただ強盗団に遭って身ぐるみはがされてもう命を取られるという時に、最後の置き土産というわけで強盗団の親分の目が悪いので目薬をさしてあげたら親分が、「それでは命だけは助けてやる」と言って助けられたという、本当に死の瀬戸際まで行ったグループもあります。

この写真は背広姿の学生達です。上海はけっこう国際的な大都会でしたから、日本の内地と違ってこういうリラックスした自由な、リベラルな雰囲気です。軍事訓練等も昭和18年の学徒動員が行なわれるあたりまでなかったわけですね。

大旅行のコースはこんな形です(図6)。上海からスタートしているところへ行く。なるべ

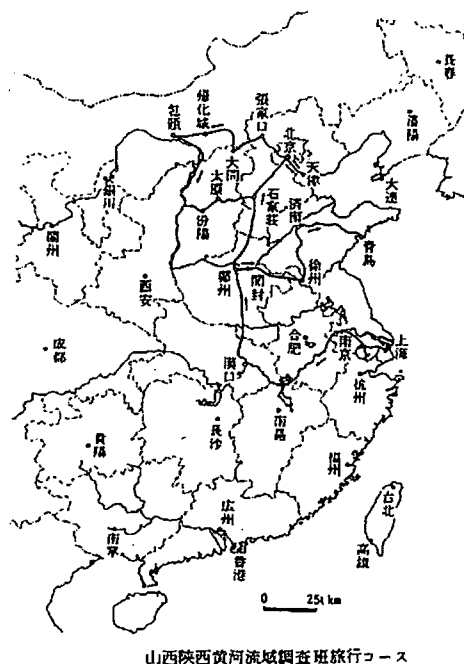
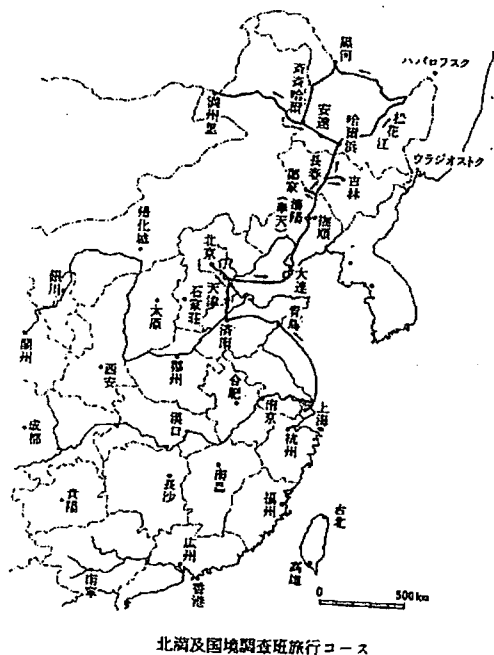


図6.「大旅行」コースの一例

く遠くの目的地へ行って調査をしに行く。その調査報告が卒論になりました。当時は実測図がありませんでしたから実際に足で歩いて、自分の足の歩幅が何cmあるかをもとに距離を計測しました。日本地図を作った伊能忠敬と同じですね、それで

この地図を作った。これは欧米の人達が夏を過ごす避暑地の図ですが、学生達が歩数で計測してつくった地図です。ほとんどの町は歩いて計測して地図を作ったんですね。当時は中国側にもきちんとした地図がありませんでしたから。これは潼関。

「箱根の山は～函谷関～」という歌がありますが、あの近くの険しいところですよ。非常に荒れ果てていて、現在、中国へ行く時の旅行コースにもほとんど入っていません。

軍閥には必ず会っているんですね。軍閥と言うと軍人の親分みたいな感じですが、実はインテリで、ほとんど日本に留学した人達ですから日本語も片言で通じたりします。だから彼等は理想を持っていました。あとでもお話ししますが、中国

の近代化は日本へ来たこういう人達が実際にこういう軍閥のトップになって都市計画や公共施設、中国では一番不得意な分野の整備をしたことが分かります。大きな道路を作って。戦後の中共政府の前に近代化を一所懸命やったのはこういう人達です。中には戦争ばかりやってそういうことをしなかった軍閥もいます。

これは西安の大雁塔の写真です。前のほうに少し傾いています。これは黄河沿いの道、強盗団の



図7.「大旅行」黄河下りのスナップ

土匪に必ず遭うという道です。これは日本でも黄砂が問題になっていますが現場はもっとすさまじいんですね。今の北京のオリンピックも工場の活動を全部停止してスモッグを無くそうなんてことをやっていますけれども、これは埃で有名な町、張家口。この写真は筏で黄河を下ったりしたシーンです。これも今の日本人はほとんど行かないユートピア三角洲というのが途中にあります。いろんな写真が残っていて、今日と比較すると非常に貴重です。この写真では彼等は日本の国旗を持っていますがナショナリズムと言うよりは、これを持たないと現地人と思われいろいろ危ない目に遭うということで掲げて歩いたわけです。こういうふうに乗って草原や砂漠を行ったケース。これは船の中で泊まった時の写真です。こんな形のものもありますし、街路の真中に残っていた土盛りのところで休憩をとっているような写真です。

一方東南アジア調査旅行も活発に行なわれ、ずっと南のほうの各地を回っています(図8)。当時はタイを除いて植民地ばかりでした。その植

民地の実態にも触れて、けっこう列強資本が道路を整備しているのでススッと動けてしまう。それにびっくりしています。それとやっぱり日本人が隅々にまで入っていて、むしろ現地の人達からは非常に尊敬される指導者となっている。そういう点で言いますと、戦争で逆になってしまったというのは非常に残念なことでありますが、この記録を読めば日本人が戦前現地の人達と非常にうまくやっていた様子がよく分かります。

これもそうですね、フィリピンへ行ったり、あるいはずっと南のほうへ行ったりしたコースです。この辺はフランスの植民地。フランス人が過酷に住民を使っているとか、いろいろそういうことが書いてあって、そのためには東南アジアの調査時にはフランス語が絶対要るから、後輩達はフランス語をもっと勉強せよというような言葉も残されております。

これなんかも大調査ですね、セレベスからスマトラ、シンガポール。東南アジアは積極的に調査している。現在100歳を超えていられる安澤隆雄さんという卒業生の方がおられますが、この方

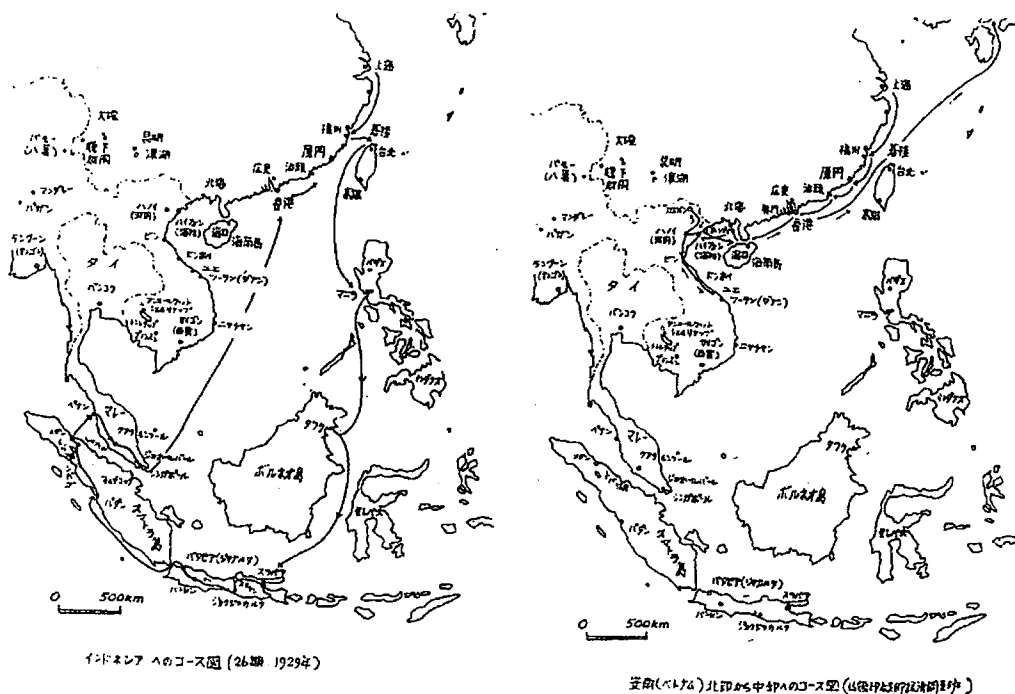


図8.「大旅行」東南アジアコースの一例

はずっと安南北部の沿岸部へ昆明経由でさらに北方へ行こうと思ったら「強盗団がいるからやめとけ」と強く言われてコースを変え、チベットへ行く予定にしたんだけど、キャラバン隊が約束した日時に来なかったというので自分達で、縦に長い谷が刻まれている雲南省の奥地を、針金1本にぶら下がりながら谷を越えてビルマ（今のミャンマー）に行って帰ってきた。大冒険旅行ですね。その途中でこういう少数民族の絵が描かれたりしてます。これは彼等の住居です。阿片地帯なので阿片の道具も書いてます。

これはユエというベトナムの古い都です。日本人が室町時代に進出していて、当時の日本橋が今でも残っています。フランス植民地の時代には国王はこのユエの王城に幽閉されていました。ベトナム戦争の時にはずいぶん破壊しましたが、今は復元されています。一方戦局が厳しくなって、日中戦争が始まりますと、さすがの中国側も2年間書院生にビザを発行しなくなったため、満洲だけの調査をやらざるを得なくなりました。満洲のいろんなところへ入り込んでいます。ズンガリや大きな河川の流域、あるいは小安嶺とか大興安嶺という虎の出るようなところを、日の丸を掲げて歩いて横断したりするコースの写真もあります。こんな感じでいろいろ写真があります。

これは先ほどの軍閥の人達。呉佩孚とか曹錕。当時としては超有名な軍閥のトップの揮毫です。こんなに字が上手です。だからインテリなんです

曹錕
九夏詠風
中華民國十三年八月
曹錕
一覽書
甲子仲夏
曹錕

図9. 第21期生旅行誌【彩雲光霞】へ寄せられた曹錕（左）と呉佩孚（右）の書

ね。書院生は旅行先で必ずこういう揮毫をもらってきて、自分達の卒業の記録集に収録しております。著名な方、孫文もそうですがいろんな方の揮毫が集められております。また犬養毅といった著名な日本人の揮毫も入っています。

調査対象は最初はビジネス関係だったんですが、それ以外の教育とか移民とか飢饉とか、幅が次第に広がって、地域もずいぶん拡大していきます。東南アジアでも、こんな感じで調査が行われていったということが分かります。ところが戦局が厳しくなるともうコースが限られてしまう。奥地のほうへ行ったのもいるんですけど、こんなふうにコースが縮小傾向になります。最後にはもっと沿岸部のコースしか調査ができなくなってしまいます（図9）。

全体としては5期から始まって43期ぐらいまで調査旅行が行なわれます。合計約700コースも行なわれ、東南アジアも入っています。膨大な地域情報が集まっています。指導者は経済地理の馬場敏太郎先生でした。私も実は地理学をやっています、そういう点で非常に関心を持ったんです。当時混乱期にあった中国でこれだけ系統的に

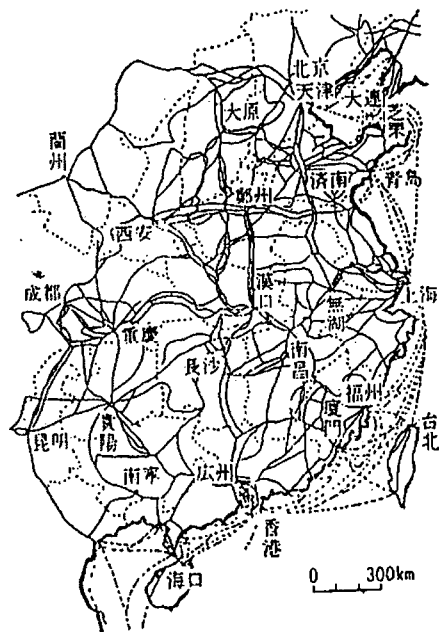


図10. 第5期～第23期の中国調査旅行コース



大規模な調査をやった例はありません。東亜同文書院の人達の半世紀にわたる記録は今も中国の人達の間でも注目を集めています。この図は調査旅行コースのうち中国だけ、それも5期から23期までのコースを示したものです(図10)。これ以上すべてのコースを示すとクシャクシャになってしまうためです。こんなにたくさん、ありとあらゆるところへ、多くは歩いて旅行をしたことがわかります。これはメッシュ毎に中国のどこに集中しているかを示したものです。このコースを「どんなふうを選んだか」と言うと、アンケートによれば自分達のテーマによって選んだとか、行きたい地域を選んだとか、学校の先生の指導によるとか、まあ非常に自由に選んだということがわかります。決して戦略的に選んだわけではないですね。「大旅行への期待」についてもアンケートしますと、現地の人々と直接交渉・交流、中国の実際を深く知る、夢と冒険旅行、大陸をより知りたいとか、憧れとか、勉強した北京語がどこまで通用するかとか、まあいろいろな期待をもって旅行をしたことがわかります。

「調査旅行によってどんな影響を受けたか」を尋ねてみますと、自信がついたとかいろいろありますね。チャレンジ精神を身に付けたとか、中国への理解とか、「人生を振り返ると」大いに満足している、満足しているというのがほとんどです。「東亜同文書院生であったことに満足か」と言うと、これも非常に満足度が高い。おそらく大旅行あたりが非常に大きく影響していると思われます。「書院の精神」とよく言われるけれどもそれは何か」という問いには、これは一言で言うと日中の友好関係みたいなことを考えている人達が圧倒的に多いです。それから「書院の教育の特徴はどこにあるか」との問いに対しては、語学とか自由であるとか全寮制である、人格形成とか実用教育であるとか、教師と学生の交流であるとかいうような形のもの非常に多く書かれています。

しかしながら、戦後東西分裂の中で日本もイデ

オロギーの世界に巻き込まれて、安藤彦太郎という有名な早稲田の先生が、「書院というのは植民地の尖兵である」というようなことを書いたりしています。後半の戦況が激しくなった時には少しそういうものに入れてしまっていますが、最初はかなり日中関係の提携というものを目指した、そういう学校であったということは今までのことでお分かりいただけると思います。

「書院から得たものは」という問いに対しては、大いにあった、中国人への理解と親しみ、国際感覚と世界的な視野が得られた、中国語が勉強できた、戦後に生きる力と自信を与えられたなどで、そういうものがけっこう多い。「スパイ学校ではなかったか」という見方が戦後あったのに対しては、そんな見方はあり得ないというのが非常に多いです。とんでもない、ばかげている、心外だ、くやしい、そんな事実はない、など書院の学生の立場からはそういう反論が非常に強い。「就職先」は上海あるいは大きな都市が多い。ほとんどはビジネスマン、あるいは領事館とか大きな商社等に勤めた人が多かった。

他でもよくお話するんですけども、僕がイギリスで講演をしている時に、タイトルとして「グレイト・エクスカージョン」(大旅行)と紹介しようと思ったら、主催者が「日本人にグレイトなんてあり得ない」というので切られちゃったんですね。だけど発表が終わったら「やっぱりグレイトだった」と言って、削った先生が僕に握手してくれました。そのぐらい東亜同文書院の調査旅行というのは「グレイト」だとイギリス人も評価してくれました。

中国調査旅行途中の研究ということで先ほどの『清国通商綜覧』というのがございましたけれども、新疆のほうへ行った5人の旅行がきっかけになって調査旅行が制度化されました。ビジネススクールから次第にアカデミーの方向へ行き、「支那経済全書」をはじめ、たくさんの出版物が出た。語学では初めて日本人による

中国の教科書とか中国語の雑誌が出されたりした。そういうのがいろいろな学生の人達の作品をベースにしながら出されていき、全体としてはアカデミーのほうへ発展し、やがてそれが大学へ昇格させるわけです。そういう成果物を見ますと、たとえば明治39年の段階でもう2万頁以上の報告がありますよということで、非常に調査が進んだことが分かります。項目別にそれぞれ書いているのはみんな学生です。学生がそのまま書いていた。大したことですね。第一線で、最初に調査した人達ですからね。そしてさらに『支那省別全誌』全18巻がまとめられる。これは甘肅の例です(図11)。ここには新疆がちょっ

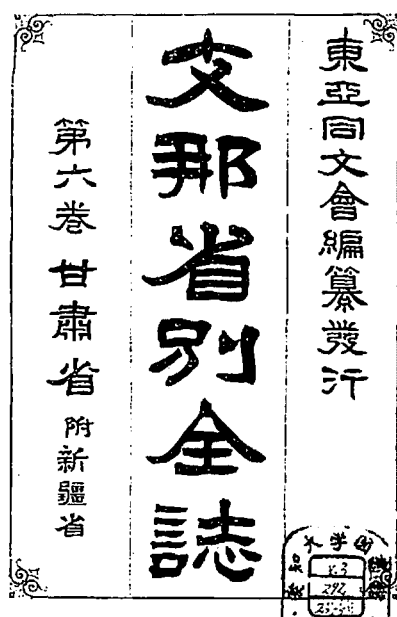


図11.『支那省別全誌』の第6巻例

と入っています。ここでもいかに苦勞して調査をやったかというようなことが綿々と綴られています。これは根津一院長が書いています。20年後に再び『新修支那省別全誌』が出版されますが、戦争のため残念ながら9巻で終わってしまったんです。これも新疆省の例です。これは近衛文麿です。ご存じだと思いますがこの方は東京裁判の前に自殺してしまいました。この方が院長だった時代にその序文に地理だとか交通、産業、経済、歴

史、風俗等の諸般の実情を明らかにするとい書いています。

これも大変な枚数を書いております。新しい版では最初四川省からスタートします。これは新疆省の省都の地図ですが、20年後の新版ではこんなふうになっている。レベルがずいぶん違いますね。より正確になっていっていることが分かります。そしてやがて研究雑誌『支那』が出されるようになります。こういう形の毎月の雑誌で、膨大な情報が入っております。この雑誌の特徴は外交・国際関係とか政治とか法制とか社会とか、いろいろ幅広く掲載されております。ずっとあとになりますと満洲関係の記事が多くなったりしますが、東アジアのありとあらゆる分野にわたって記述がされています。それがやがて『支那研究』という一層アカデミーな雑誌になり、最後は『東亜研究』、つまり東アジア研究という形でさらに名前を変えていきます。その他にこういうようないろんな出版物がされます。

これは私がやった手書きの調査旅行記録の翻刻なんです。手書きの原文はなかなか読み難いんです。それを私のほうで、何とかみんなに読んでもらいたいというので活字化しようと思立って進めてまいりました。今まで4冊出版しています。これは第2巻目です。それぞれのコース別に収録しております。原文の中にはこんな草書もあり、皆さん達筆すぎる例もあります。私がやっている仕事を中日新聞で紹介していただいて「大変なんだ」と書かれたら、読者の人達30数人から手紙がまいりまして「お手伝いします」と。そこでこれをお送りしたら誰も「やります」という返事が来ませんでした。それぐらい読み難いんですね、

私はこの翻刻・出版の仕事をやるにあたって、書院生は本当にきちんと調査をやったのかどうかというのをチェックするために、コレラが広がり予定地の調査ができない班が最終的に台湾の向かい側の福建省ルートを調査したのがあったので、そこを10日間ぐらい記録を読みながら歩い

でチェックしたことがあります。ほとんど事実そのままでした。そういう点でこの調査報告書と日誌記録は非常に高く評価できると確信しました。しかも予定変更という一番悪いコースだったのにきちんとできていたので、他のコースを記録は十分に信頼度があると考えたのです。そこで記録の中から各コース毎にどんな事物が描かれているかを地図化したものです。例えば山西省。軍閥の閻将軍が日本の真似をして非常に治安のいい政策をやった時の図です。女の人も夜間1人で歩けるよ

というような記録が出てまいります。これは交通路。これは人口の町村別分布等を表したものです。これは天候です。秦嶺山脈というのがありまして、ここの南はモンスーンの影響が見られます。ここから北は乾燥地帯に変わります。それがはっきり出てきています。これは社会不安がどのくらいあるのか。飢饉や強盗団も含めて不安度がどのくらいあるのかというレベルの分布図です。

当時は統一貨幣がありませんでしたから、どなたでどこでどんな種類の貨幣があったのかを調べ

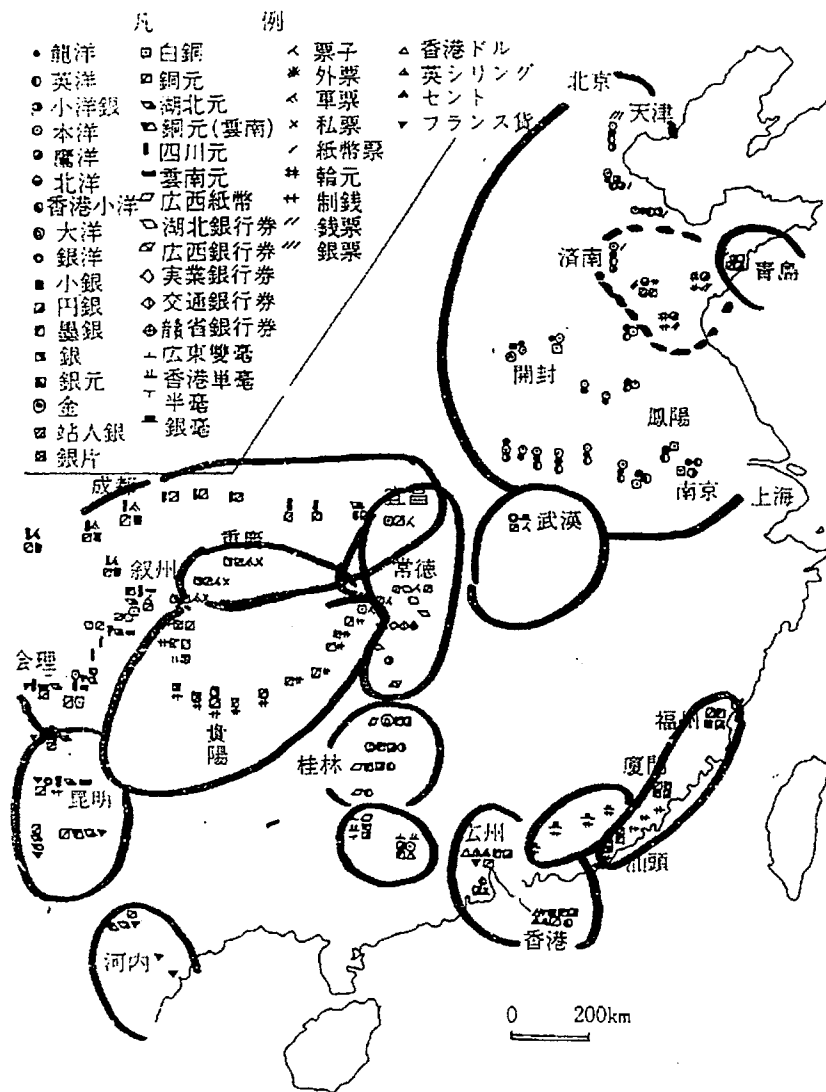


図 12. 第 12 期生各コースの記録から示される通貨の分布と同一通貨圏

て分布図化したものです。こんなにたくさん種類があるんです。なかなか大変ですね。それを換金するのに山西省の商人達が特別の換金率を使って儲けたわけです。同じ紙幣を使っている地域を円で囲みますと経済圏が出てくる。当時の中国の基本的な経済圏がこういうふうに描かれます（図12）。今度は言葉です。北京語をはじめ、いろいろな言葉があります。それもこんなふうに地域的なまとまりを示せます（図13）。その言葉と先ほどの経済圏とをダブらせますとこういうふうになり、これは文化および経済がまとまった空間を

持っているということで、今日でも中国を分析する上で基本的な鍵になっていると見ていいと思います。これは阿片がどこに栽培されているか。だいたい北西部のこういうところ、省の境目ぐら多いですね。そんなことも分かります。それから土匪（強盗団）、これも省の境目です。元々は揚子江が氾濫する下流で農民達が行き場が無くなって強盗団に転換して、戦争があって兵士達が強盗団に変わったとかいうのが多いです。省の境目に多いので省を越える時に書院生は非常に気を付けて旅行をしています。

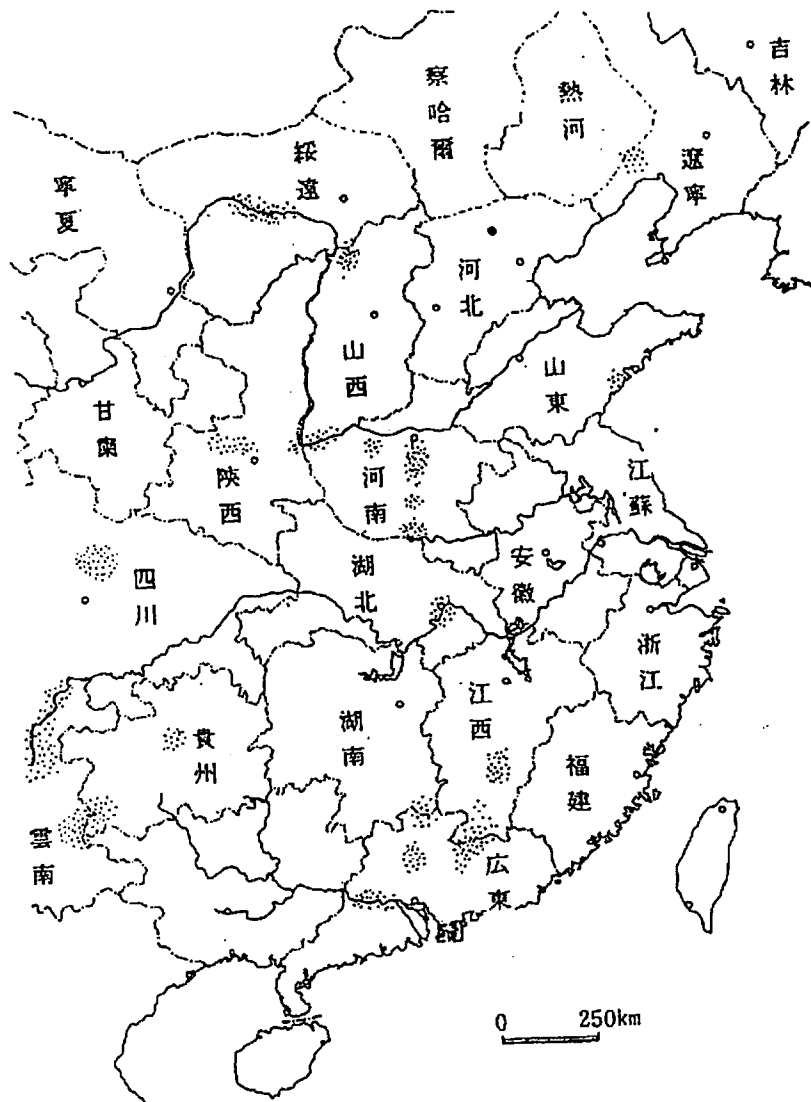


図13. 旅行コースに記された土匪の出没地



反日運動が数年前にもありましたけれども、やっぱり戦前にもあったんですね。この写真は日清汽船が焼かれてしまった時のものです。これは中国に対する21ヶ条要求とかが次々にありまして、中国の人達が反発した時のものです。こんな奥地の砂漠に行っても反日運動が盛んでした。だから旅行が途中で続けられなくなったりしています。当時の反日運動が各地で書院生の旅行日誌の中に記録されて、それを分布図にしますとこんなふうになります。反日、反英運動です。これは1925年5月30日、上海で紡績工場の労働者達が日本の経営者に対して街頭デモをやった時、イギリスの軍隊が無差別にデモ隊に発砲して、たくさんの中国人が死んだんですね。それに対する反発が全国に広がる。これがナショナリズムのきっかけだと思います。その後蒋介石さらには毛沢東が政権を握っていく上でも、中国の人達がそういうナショナリズムを感じたのでしょう。今度のオリンピックをめぐる、あるいはチベットをめぐる中でも、中国の人達が中国、中国と呼んでいますけれども、その一番のナショナリズムのベースはこの時のものだろうというふうに思われます。軍閥の人達が戦争をやって領域をいろいろ拡大していく、その中を旅行しましたから、そういう記録がいっぱい出てくる。整理すると当時のある時点での軍閥がどのぐらいの範囲を持っていたかがよく分かります。これはそういうような軍閥がどんな近代化を遂げたかという状況を示したものです。ちょっと時間がないので省きます。近代銀行が古い銀行からどういうふうに改変していったかというふうなものも作ることができます。

今度はいよいよ満洲です。清朝政府は長いこと漢民族を満洲へ入れなかったんですけども、ロシアが19世紀の半ば頃から南下してくるので、清朝政府が部分的に漢民族の入植を認めていくわけなんです。1920年代に入りますと猛烈な勢いで漢民族が入ってくる。最初は出稼ぎなんです。春に入って冬に帰ってくるんですけども、それが

やがて定着化していきます。今度はその10年後に日本の満蒙開拓団が一斉に送り込まれます。どの港から送り込まれていったか、そういうのが全部分かるんです。なぜかと言うと書院の人達はお金がありませんから船で行く時みんなデッキパッセンジャーで、雨が降ると濡れてしまう。そこに中国人の人達もたくさんいるから、中国人の動きもよく観察できて、こういう記録ができるわけです。これは漢民族の人達がどんなふうに動いているか、何月に満洲へ入ったり満洲から出たりしているのかを年次別に示したものです。大連から上陸した人はどの辺まで行くんだらう。どの辺まで入植しているだらう、という点を見ますと、ほとんど南のほうが多いんですね。やがて日本の入植団が北のほうへ入っていき、少し対抗関係ができたりしていく。ある意味住み分けはしていたんですけども、土地の買収の仕方とかそういうところに幾つか問題があったようです。

以上を通しますと、中国が1930年までずっと来て、そのうち一部にところは資本主義的なものが入ってきたことを示しますが、戦争で消えて共産中国が成立していきますとスポンと切れてしまった。文化大革命もあって1980年から改革開放が進んで、やがて資本主義がガーンとはいつてきた。その元はと言うとここの1930年へ接続しなくちゃいけないんですね。そういう意味でも現在の中国を理解する上で、当時書院の人達が記載した中国の状況をきちんと本質的な問題として把握しておくことが基本で、その点で書院の記録はもっと評価されていいだろうというふうに思っています。

そういうのを受けまして現在愛知大学は先ほど学長が言ったように、文学部を始め各学部にとわって中国研究が行なわれて、現代中国学部とか、大学院の中国研究科ができていますし、文学部の中でも東洋史やら中国文学やら東洋哲学やらがあつたりします。中国が全てというわけではありませんが、そういうものを継承して東亜同文書

院のシステムが愛知大学の中に入り込んでいます。ちょっとそこまでは今日はお話しできませんが、こんな形で今日の愛知大学に引き継がれているというわけです。

ということで、少し急ぎましたが私の発表を終わらせていただきます。あとでまた質問などしていただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。